誹諧景感道

傳受可秘書

伊地知文庫
文庫20
175

文庫20
175

宮内省

北天竺南天竺秘書

景感道

全

景感道

一景ハ賢愚たゝ眼前ゝ有連流の所
そいたゝ流しゝて詩の一所之感ハ物我吟
味しゝ面わしゝ合別なる事ハ感心事なさ
とのゝ中乃一所を子おれ｜道ハ流｜
うゝ（君子行也悲不孝之小人）言外の味なるハ學ゝ及
かゝ面しゝとゝ水遠成不聖賢乃如此論語、
觀察の三段ゝ子ゝ乃ゝ
論語ゝ乃ゝとゝ如ゝ

連歌は、景感道初中後心の有さまを、俳諧の初心の
奇なり。九品位公任卿八品を連歌にも連歌にも
初中後と云へり。初中三品中に三品後に三品
の初中後あり。是れ品位なり。能やすらかに
なくしてと行程を撞しかんぬきの心なり
ひとしかり。　是近教道の所心
中つ頃いまも長高優なる方又奇特
神妙なる品位なり。天竺唐土も心位
先々なり。殆ひ一つ宴なりまし歌聊と無
心を主とし、言葉清しく、初句麗立を
初句とし、後句の人も中つ頃
う詠へ。お哥ばかりにて後句の人も中つ頃
道理なりかの成ぬ。成ぬ成ぬ成掛ってとなり
山の端の月口惜月の片口惜
なりても水に月なる。初句
源氏未摘の巻に云河と心を詠
巻に有まかく夜うと詠も
う。歌も詠の郭

連歌十体を立てり是ハ人の好む所にて
なり是ハ人の好む所にて立て合情
うる不道理なる事なり
何も思ふべきなり

明けてる萩乃末露ハ白の入ぬ山の端 紅人

是ハ言外の心ありて味し眼に
見れハ面白成るべし
「言外のうるおひ」
「外ゆゑ」と句ハ是ハ是ハ
ぬ

繚乱ける清て秋を初んの人
り孫の京は遠なる赤ハ
清まりて秋の月出る雲立
秋を道物なくなる
人を兼ねる繚乱
ものなり

○心廉乃中の衣乃言なし
○彩ける紅葉の匂ひ月ゑ
「ときより周き道ハ入ぬき」

遥かに照らせ山乃端の月

足ハ縫文もむつかしく難題なる故するゆゑ也
むかしく迷ひ玄の歌の道の行手に今更
指南とや云へ難しき名も功志かりてハ
難題と申す歌なれとも上てハ謝書ぬあたり
功の入候様奉書又あるまゝ月花抔出来ぬしと申候
如斯率初心の覚悟之為別往候ハゝ後悠の
上候と申候事誠にありかたき事となる也
先哲庭訓論語李氏篇鯉趨而過庭

詩よむ

學詩乎對曰未也不學詩無以言鯉退而學
詩未畧之仕候めてかく古人の句とも申候
第一もかゝりかくと候
柳御句ともかく奉拝仕　公方家御不存而記之
初心のうちとは出来かたり一通しよと存候牟つ
作り候後の比上中間ある事と存候有事を考候と法披
露も不仕なりて殊可惡候

初　○守紙の切帋篇初の句くうひ之鉄面て
決て難見一不編書とんハ笠側ともえ候しきく之

蛾乃囲めるを二句に詠む

○蔵こもる蛾はあるけむ寺もり　智蘊

○人如蛾乃句ひとつ伊勢ごころく

新こもり蛾の蛾ぬけ殻の山ぬけて

山ぬけと詠る初人の風となり誠に堂もり

初人乃巻に俳諧なりより合を始て詠る

初とも何ぬて行るを中と云ぬて詠る

後と云ぬ也

○こゝ詠や蛾乃陰ゆ見るゝ蛾　宗祇

○梅宿に人人の宿乃春

人や八梅宿に蛾の人ゝ蛾の陰ゆ宿の春

なを行く二夕雨紙あらひ

○浦ひしくも去る面こゝろ　心敬

空元

○原を見やく烟ゆ霞む原ゆく

前句八行く霞しくゝ紙浦ゆ紙如蛾

を見る紙行る面を紙乃を詠ぬ和詠

つゝく初人の句こ　古今集

新せこの夜の袖紙次ゝ

うゑ[illegible]紀秋乃初風

○紀あひ似り[illegible]夏の一時

○胡蝶と如[illegible]人乃夏波すゝ[illegible]草

[illegible]波游[illegible]紀乃似[illegible]草夏波

同文なれハ

麻物論畧云莊周夢乃胡蝶

夢乃胡蝶[illegible]莊子

○すみ[illegible]ハ[illegible]の花のみあて

○長井乃浦の[illegible]ちう[illegible]月 専順

伊吉郡の間ハ長井乃浦の中ハなゝハ長井

の浦の青乃松の月と云[illegible]く[illegible]を縁情[illegible]

云[illegible]紀と[illegible]と云[illegible]る初[illegible]の[illegible]

○[illegible]と絶ハ[illegible]く[illegible]

○[illegible]この[illegible]成富士の[illegible]高 宗祇

(し字不審)

[illegible]ハ[illegible]物[illegible]巻山不讓

土壌故能成長。江海不厭細流故成其深。高

空ハ。[illegible]紀安[illegible]

○同[illegible]如[illegible]乃松 宗砌

前句の心を人外と云るを疑ひ侍る

○同一般にあまたあるべきなり

○秋と吹萩の上風 山田孫[illegible] 心敬

釈尊滅後の法法の始は人外別法なり

煩悩を空なる西流は立たり

文と萩の上風や万物の[illegible]を[illegible]

[illegible]と云るも[illegible]

○小萩乃吹て人[illegible]

○夕[illegible]れ庵の山乃月待[illegible] 宗祇

[illegible]庵の書て[illegible]

て西[illegible]と[illegible]

明ぬとく[illegible]

跡吹送る 萩乃 乃風

文城[illegible] 萩や小庵の書[illegible]

[illegible]より夢の[illegible]

○庭[illegible]

○[illegible]日八[illegible]乃[illegible]人[illegible] 智蘊

新古今集

寒ゆるき時冬人家の陽気をたのむ
ものゝ窮を入懐に
○寄山や雪初ぬる頃那武　心敬
○梅をこそ春の初花と人ゝ
○菊ぞ見る尾上の雪は飛鳥川　素堂
ゆゝしき事ゝ思ひ給へしるを今見合せ
○うしとていなん市も見て涙
○木の下紙子ものむ高野山道遠し　空
道なき世ハいなん方も知ぬ　(そとゝ)前句ハ
二界ゆゑ猶如宅毛とかゝり
○せんてハ家伝の梅さまゝ　宗祇
○二乃のうみも絶ぬ恋ぎた
恋乃欲恋の連歌を行程も俺く弱ゝ
すゑとなくせんて字にゝく詠ゝ
竹林荒秋後ゝも入ら拂ゝ
○唯一ゆゝ年ゝ　空
○ゆのゝなと別世紙ゝ読ん
前句唱名ゝ佛ハ除罪するゝ敬

色一夢あるくもの別墨八俳仏不入事
よと水ゝ彩し

○なを海棠濃ふ咲るさま神　宗祇

○おとゝひ俺行とも人八逢ぬ我ホ

枕の字ハらく なをまさり中ホて入色俺
なをこ云毎一句ホこれホく初ハの風物とて
宗ホ乃ゝ主ゝ乃ゝ

○又森ホなれ八春もなほ　心敬

○咲るさも同し宿ふ旅の乃

初ハのよりし

○かゝも果ぬ云の葉乃　宗祇

○澄るる旅のあふ○潤ひし　宗祇

一波雅ホし友ホ云葉ホうきハとすな
移ゝ乃やうき移の こ旅く
琴

○すまぬ人ホ底ふ乃

○こ濃の澄潤る　船の

○祝ゝさを為　源氏ふ人ふ

○うゝ人八忘れ何の原　専順

[illegible]

○[illegible]人もまこうき世界海ん　心教

○風乃塔の　暁　乃　雲

中欲

[illegible]

[illegible]

○こもる[illegible]人のなかを[illegible]ん

○独さ[illegible]住をすまさ[illegible]の奥　左

[illegible]の[illegible]葉[illegible]おの句（[illegible]）[illegible]

付句ぬて云[illegible]海沢とハ[illegible]沢の事し

[illegible]上初ん[illegible]根元ぬして連歌どん

うまよ[illegible]

中

○中の連歌ぬ方ふのよひく[illegible]

儒道ぬも佛乃ぬも中道を肝んする

○奥な[illegible]うもし本うを乃乃

○散華をちらすは八雲抄に
中の巻に不似合とり見八雲抄面白見
ぬ方人に取不成事也と云事歟
なり所々くなし歌枕雲霊とも
○海ちくしんやの云の古墨　順
○湖水も朧月夜の旅枕
旅夜長夢　訓まくほしやなぬ
（此一句是と不可ならんと擬えらる）
玉や那やと歌むの文
是と那の玉成ひやりする前のんこ

○うらとやの成もむ神のほりの
○咲もの深かのを法のんこ
見八初人の雅及ぶ不おの白成れ合面
なする百年不長乃年高乃年
年く海花で云移の連歌なり所連
ともんかの秋なく所くとり面風
情中の玉ろこ
○いの時不長まきまれる
○世をいとも散こうやうん　家柳

面白くうまいまりくうまみを細さる
五中のうなぎ
○いうなせんかしく浮世八屋敷
○彩雲月八洞庭の月
○小萩ちるひ男廉明るく　心敬
○為敏尾上の文の詠みて
有人郭公聞くことを吉文所ち
後人の連歌をも云つて
言葉の尾上乃文の秋萩

遠白郭

○海面の波乃立て来て入　立
○雲の嶺聖高の遠山文外く
残りる白として数巴にして講人おかさ
新句
○元八一時面の雲ふつきぬる
○立海平紀未形ち山ふ雪晴く
古歌ふ
寒ひる故八雪も海ふらねと
山乃端ちうきタられ乃面

○いつ[illegible]る音か鹿なくなり
○むさし野の萱の末ふく秋の風　仁教
消まとる[illegible]形見ひ遺りてんかさ連歌
○[illegible]めもまき葉打ふく夕烟　仝
○旅[illegible]きの山里
[illegible]雲尾冷[illegible]妻屋のこ[illegible]
絶なるぬとらく行[illegible]り山張なる却り
[illegible]り中の女立[illegible]
しさを訪く書[illegible]雲せん[illegible]却り

やりるとなる事
○こやとハ人をいつ[illegible]
○いとあ[illegible]ハんまくは
来迄と云迄海[illegible]きとく見ひ初く
人の[illegible]のとく
○[illegible]行ぬハせん　心教
○命[illegible]人[illegible]ぬ[illegible]
[illegible]世[illegible]
[illegible]なさ
[illegible]

○こゝやんなうこさなの多や　心敬

○一枝庵一人ぬれぬるも袖とけて

古歌二

こゝやしらも没初てうり流れハ

神のこゝろ　ぬるゝ心の井の水

義理二つ行り人ハ雖面不忘ハ打ち

毎ゝ後悔ゝ又の歌　教歌

ゝ人なゝハ立ゝくの教めもん成ハ

ゝき性一枝うゝ成るゝものをんを

悔し者ん悔しゝ解ぬ深くゝ者ゝ

云ゝ連歌も歌と正風ハ別ハ

初の歌を用ひゝ連歌中ハの

者歌なれハ初の歌を続ける

○人をうらみくゝ何ふハせん　いかるハん　忠哲

○ゝ主ハ世間の家ゝる秋乃月

古歌二　歌ゝて月やハ物成ハ世ハ

かゝゝ思ゝ永洞郎

ゝ者あてかゝ主ハ

○ゝ形さゝのハゝふの道　宗祇

○世を思ふ人は身を思ふ情なり
命をすてゝ名を残す情は
武士専なり

○なるべくは世をすてゝ
○古人の身をおもふよりも
学べるまなび

家秋

又
○永身の老の恥れさ
○色と欲とは黒ハよりも黒く
老女に対して云ふ成り変ふつまんも老る

立

古詠
鳴呼雨

○雨ふやなん吹風の音
○未飛く畢の井戸の鶴の夢
○世じ命とう迄なく命よりも
○苔しなるのやうと云の葉

心教

立

大ゑの歌に古人の花といふ歌

月は雲やあらぬ春の夜の朧ハ何ぞとも

しらずかすみの山のうへの月

をみ人をしらぬ所ハ何ぞと世間の人の忠度

のうたを皆ほめたり

○旅ねとは古人の人ぶ待れぬ　心教

○山路を雲の海ると云ふ　心教

その字千人ぬ海ゆく船をうて

人を待ぬ海とうらやむんわ〳〵ハ表原し

関白殿の長の初の句ハ字長脚半三

分ほの時下句の文字字縁りを変ゆ三句

文字ばかりの字ばかりの例まさ所ばかり

後

○後の連歌初ゆ人ハ人もすゆ一さ

渉風と聖ハいふ所ハ

○第五ハ結句ゆ歌乃　夕人ま

○下句の竹葉ふ淋し　表の句　字加

若葉下淋ゆ雨ゆ濡ふ表ハ竹ハ

又物より長ゆすると云ふ人ともて八有時

あるを家と称して枯野と果の字続らく
れなり所詮万世の曜代なるべし一人の
人称うるあるべし

○ 今一声と呼けほとゝぎす　心敬

○ 梅咲まがふ雪の夜乃朔朔

今の字れやう所詮とても呼りなるべ
梅さく朔果乃風景面白く思と呼やも
なり前句乃一声字て又一声と形容
と見遠く付たる歌なり

○ 寒ゆく鶴よもの雲のうれ
○ 思ふ痛む心の海ふ乱の散と見て　心敬

寒ゆくとの字付て後の連歌多く
初て世句式乃連歌とすりお学て紀連歌
人八国果の形式云立乃思を摘抜て
連歌発句乃心を頭て散句後式
志部に寒る鶴よ八思ふき和と連も寒
ゆ八連とと形事

○ 右之門弟乃名連　智蘊

蓬生み松風吹てむもれし
月ゆゑ袖ぬれうハ宮千紀の雲や
吟之の御ゑ　花とうなくなりり
見ゆゑ行きしくく
○むしの人をいうて高きん　丈哲
○古人の歌をもて月の形森ゆ
是と言ゆの味のちり紀連歌くたの
月ゆ独句ひてハ句事をゆ見ひおきんとし
○かりゆ別ゆ　伴はきうを　智蘊

○世の中我妹の形ゆ乃奥の庵
元ゆ家の名ゆ絶をかなれ　後鳥
世ゆの海も　みやハ歌うん
桂ゆ面ゆ生る稲の穂ゆ出ゆ　沙上三首
世ゆ代ゆ　妹ゆ　ゆ
うゆを免ゆ別ゆ　うゆ世の妹ゆ乃
所へ色慕ゆる　るとなり　姿をんを
凡俗離色ゆる連歌なり
○家ゆ妹　御ゆん妹の家　心教

○萩の夕露　雲の上唐合
言外の連歌奇　物ぬしをいとさとりなり
○魂をおもふ　ものうき消滅あり　心教
○古き郭の萩乃夕陰者
藤氏の故事し　魂再仕君迄云ふ海ハ
秋の夕露の故なる消滅するとうんて首
乃人の魂ものやうなるなり
○浅茅ヶ宿乃人の面ゝ者
○蓬ハ生る夕の露を問あり　久

人の面ゝ者の面ゝ不及是非なり
古歌　蓬葉のみうらふ深ぬんりあ
行ゝハ家ぢ絶むと思ひ
宮ゝ家ゝ不諫の歌ぢ絶て三百ゝ品の
字毎ゝ重て　歌意
○人ハ人のなりなるもん　砌
○意死をもむ子へ紀之人深ものて
見と三言の連歌とも云過去歌立来来を
切ひやるなり

高野分をんかの沙汰にて
人の命のおしからぬ有れ
○彼もおろかに行へし
○玉章の事共張りを書やりて　順
とのゝ字ふ所ありて所の沙汰八年
てもれ物なきし彼もおしからぬなり
繕ひもうすり物おきなり
○月沈りて赤風をふく
○人人八高雲なく雲見て

唯とは人一貫見て行事八月八日に
人々沈海り赤風八高雲なる風結
其人なりて人よりと物前ゆ品を立
する事ゆり是八京乃連歌と云
とゝ源氏源平のまゝ古院の歌のゝ
こゝとしてゐると云面けゆり
○枕草子和よりるとこゝを立
○海とゐむを貫ふ何ゆる人やうん
とるとゝ事ゆ枕草子ゆせて為とのを

蕉なども如何の空をうん

○人生八高楼の月花のこれる

○明ようりさの子の蕉八訪も

古歌

明戸明て弱るうれめる一夜哉

蕉子の星哉うれむ仏者

元禄記年月一年中の也拙のもくを落

蕉と成果く月高弟る弱るや

弱るを訳金の眼哉作て尽とし

唯識論巳蕉猶八蕉のうをとさきう

加

○うれーや拙と何る生(イ生)をん

○おの世哉人生八洞の空をな

おの句年来空と親しみ何西の新年

成る拙とも何の空丸西う大切く空

り拙行西生丸人とこいりとこる

不句哉安くと云て私もんうりか

○意一法ハ拙もくか

○所もいりうい明一の人 加

哉古人哉西ふとく又意を西ふ人間

うしとこの世を厭ひて仏祖の教を尋ね求めて道を
遂げ玉ふ事は人間の為に永く仏法なれば
なを欲くとなり
以川氏も菩提を求めさせ給ふ事
まことなれば人の法と云まじん　宗意
○人法なくば法を得ん事
○波しも法華経を絶する故さ
宗祇
に法華経を無ましくて人師の
作り様に成ぬる故△如波得故

乃法文を叶ひたりし八宗の人法なく
八法成ぬ人をうる法を得る事は
無て邪法を成人（中古の人八宗法華
邪成なる無て八宗邪法と法華
様に成る無ましく法華経を
志て無る故に何ぞ八宗人（もと人源信と
実八宗無て仏法の人
仏して得ん事を祖師の教を
○行者も学八宗（白蓮法　四

この物語り人麿と家りを志賀の濱
前句八帝王の行幸ゆゑ紙姫なれて
なり景感道の句の旬なり行なと弟の
行なことりうくるとうらう七社の神輿
とうんもの那くも軸ケ社八神祇を安
ゆ屋とのく中後の連歌を初んとくく
尺とにそきく初紙重して学匠
ち分めく中ゆも初んゆ初ら中
後とんるなくハ邪論入く一句も正祈

こゝ論もなさいうくゆ屋ゆなりゆん

本間とゆ

兼載 立判

△洲一書八直清秘しかも宝邪（出）一紙八清
し紙尊房公法印御所望にて印玉机
下示墓かしかも写しかもしかも句意秘事代正な
右巻内
○詠こと詠ひ千うさん林の空
○花千夕うの迷雲ふ月今
心数子所しまて
て人云ふ毛ひりと御書有宝ふ切かも
印好ふ示の詠意千句の没骨変有海
老一大事し連歌の所うる日〻今詠諸示

きるを以て句の紙味ひ連歌のごとく楽しみなけれども八雲抄なども連歌八雲抄等出候説諸色抄雅者有之歟少人なし

世捨人雅と定め而人の句少なく候事

一若葉　蔦の紙結ひくきえ　宗祇文庫

一蔦の紙句意口うるさく候ハ神祇釈む

きひきるハ悪く候二句ハ捨てきし

一玄ぬし切字ハ一毫の口実

一紅葉紙雅なりとて所以

如ぬ人うらうとも紙紅葉乃ごとく

粧ひ色ハ当一毫色と紅葉と色と

色ハ全く姫雅なるをいかゞ雅と答

長秋の二和歌を雅と長歌と長歌

人多うるし姫乃一景和八月

なり紅葉ハ月ハ長と紅葉紅

葉ハ対一句二和の景色といふ云

長次尺段ハ句もゆゑ

ありしの歌ハ展傳あるべし
四度新の月ハ度

一 發句會之事

人丸の寫像あるを天神の名号あ
るも可掛共人ハ知席あハ時なれ
三具足絵ハ共人ハ出なくも
賢又ハ年忘なるあるべし

一 講師 筆之 退席 賀高 高乙

宗匠勝行撰退連底名兼題一ツ發句
二ツ如書の懐紙皮所ハ懐紙あ書し
歌ハ短冊に書三ツ折ハ表二行に探題一ツ
短冊に書三ツ折ハ表ハ全く墨
面に兼題の發句書する懐紙ハ底付
文台に置ハ
懐中して席に

歌一首一度猪子に成人順に宜き
て家道讀師紙に動かし事相成
像前（句）九の方（成ス）に変
講師（様）に一枚て文義のよ（家道
歌を満足其日の家道功者と面く
者く変句判断なり

一發句合之事

△九寄紅葉宿　何歌も猪子紙作り
説諸紙歌も前紙なれども

△右寄　松霧　右月断

九右く紙作りなれ共て杉系するなり
九歌像の前（歌く変句短冊に読めて
文義を歌名を家事書事当安く家道
の時宜八郎長ゆく一句宛に成九二句
猪頭と兎飛接移有（一意紙八兼日
葉（ゝゝのなる八万一家道（九せて
人やあの今に次ち二句合の時も

兼光ようく二分なる執筆一分宛与み
上ケ置く又上執筆と云有り是八筆て宗近
一門作く宗近當代判り古事八関流
ゆく執筆く執書有宗近へ渡て遣し
遠さ古欲古持ち所へ指る方へ
作り初の毛とるく天祝持て是八再
會と頃ものり帝殿分合せ為て
作り毛う事和九ト毛一無るり

短冊ハ名ハ不ナシ
裏ニ書も有り

○文葉寸法　長サ九寸七分　巾サ六寸　六所金和
巾サ六寸七分　高サ三寸九分
梨地平蒔絵もり　恵安元年二月
二條大閤教祐法師関河合新の教も有り

○硯箱寸法　長サ八寸六分
巾　七寸七分　梨地平絵ニテモ
内ハ筆一対苦刺雅耳カキ入
一遊悼の考へ作く八蒔絵雲うへ他人へハ
蒔雲下ハ書と八敬て後人の異説と

右二條家之御筆 写也

△是先年おゝ一書如此右様ゝ必ゝ富貴の
人不可有之事 写申事なるべし
當時人〻の私宅家に蔵之の品と申
しるす時〻如〻深切し御諚被成
思召者不浅 度〻通傳有之候ゆへ
元亀元年老人書判

△別書に云ふと云事

一謙信御諚名日なのゝ云ふと云儀も有
所の字を言葉書とも不書行成の
もの字といふ字抵ゆへ所と書給へ
八重御新ゆへ御諚と合ち爲ハ
とゝ云しの滑稽を極くの爲と今日文字
ハ云ふ抵ゆへ書て云者を云ハ如此云る古
御〻あとと通言ありひと云るゝ
氣所一の本平出るゝ文字を作り

てハ何事ぞも書置一定家心古今
ぬき抜名をかひハ牛の人と芦牛乃
ことゝ也日本紀ハ有一氣と今俗ハイ
ソコヘヤ玄武カム(ヒモロ)ぬしく南てヤ白氣と
一氣の転ぜるなれあて合神納るあれ乃の
ハ物一度のひ物うしに古今ぬきぬと
入ぬ東方朔の天人ぬてハな
名月日記ハ此別ぬると云もの事の
大御傳度也夜の事の説法なきハ中く

古今集ハ八万といふ理を考る人稀く成り

又曰てハ名ぬかひハかぬと金氣土氣
なきハ命くハしむてつしむハ前乃
秘と仏ぬとのてハ名ぬと連歌しく
うひぬと神ぬ事仏ぬ信ぬする事
私ぬ唐の説法説法ぬくいうてひ
ぬと自私のこぬと業とせんや
當ハ八世ぬ秘くんとかぬ秘ぬ

梅乃もとにて

むとくしていとひ一物を

ひ吹の毛色衣ぬしやいまも

とくとうとく所は如しはあ

いくさの田城はかの郭公

たてのかとをはかなくよ

かのくはしみの前く貫く御かうか

あくをひうひと有り世めをんと書は

声とかひ遠うく書かの古今かなて

読人不知

素性

友宗敏行

書きるも一つのなつかしき

右定家秘記内写之水戸黄門公

御文庫ホ三條内大臣殿御校合畢

○別ホ爰想之口受

一爰想下し句の時ハ又切字ハ或句ハて

表ハ多九句ハもるく爰恋前ハて或

詩ハても此ハてもも右全爰恋の人人

投角一家近のもの事と有人記

一 発句の十七字脇より十七句を五句
の上文字ばかり事なり
一 天神名号ばかり記されハ會席精進
法衣服事ばかり不免
一 東帝し御新會席奥新法衣不完
一 渡唐の御新の時ハ精進法衣を免る歟
名号ばかり奥新を免る事なり
一 概是句ばかりなる故義ハ諸此一又
追号追悔十句百句ハ片吟し形り

一 なし式し時ハ廣要ばかり歟し間ハ面
世方ばかり形ばかりと成者なるなり
一 又稽古者炉ばかり歟ハ面頭滿座と者胴
不切ハ合行要なし句ひの茶の時ハ亨
主ばかり炉ばかり持ハ歟ハ句ひの丸出来
し的丸の句を成者稽を立るハ者
なりと的者ばかり歟の前ハ句て丸の
句吟をる形り歟ハ速ハ丸前の時稽を
面ハ丸花ハウラ面ハ半有

一連歌八十人ニ成ル八代ハ[illegible]ぬやうか
[illegible]句[illegible]三ヶ成ル[illegible]の句
[illegible]

一常ニ初懐紙三句先ハ家道の再遍所ニ
連歌家道の句紙待合ヲ座ニ句長ケ
[illegible]ハ句ヲ[illegible]

墨次ニハ度　ヒ名字ヲ[illegible]

○[illegible]出る郭の空よ○郭ニ
○[illegible]墨[illegible]かくれ侍らん

紙道の秘書ニ世ニ[illegible]白川と云て格合
秘事ニ[illegible]ハ人ニ者ハ[illegible]
成ル半[illegible]

雪月花ハ[illegible]度

雪月ヒと云句を世間通用ニ傳ふ事
云し[illegible]家の[illegible]ハ[illegible]
[illegible]

一[illegible]雪月花の句ヒ[illegible]

去の年或一句を求めて三拾句雜也

一 秋高月光の句多有ても秋の胸一句無て
帝るゝ哉を形くゝ一句無て拾る也

一 高月、九月秋を三度詠る時三雜
多く去と云て高く詠る重秘此味なる紀
人や論を人うゝ世事景感道所文を基て秘

一 延万句延句ゝ事ゝ續万句續句
無八せぬゝ右高月、九の句の事
一 雜の月口受 夏名を

墨附ゝ三拾句牧

于時
寶暦九己卯年閏七月書写之者
小尾後嵐高雅 指英亭 ゆ叔

于時寶暦十一辛巳春三月書写之

秀業亨 柏史写之

中村治好